

“安全文化”をよりいっそう、高めるために— 第13回 医療・介護安全大会開会を開催して

安全大会実行委員長
耳原総合病院副院長 病理医
キノ シゲオ
木野 茂生



2000年7月に発生したセラチア院内感染事故から、13年が経過しました。「医療・介護安全大会」は事故翌年から毎年開催しています。今年のテーマは「安全・安心・信頼の医療介護を提供するために、職員の安全文化を高めよう」とし7月6日(土)開催、診療所から1題、総合病院から2題の演題報告を受けました。



小畑 ひろみ 看護師
(耳原老松診療所)

人口透析患者様を受け入れている耳原老松診療所は「患者様と取り組む災害対策」と銘打って、地震・津波を想定した避難訓練を年々バージョンアップしている様子を発表。今後、同会全体の災害医療の手本となる地域の防災対策も視野に入れた報告でした。

総合病院の感染対策チームは定期的に行っている「感染対策ラウンドの実際と今後の課題」でした。病棟と他の部署によっては感染対策の



五角 美奈子 看護師
(感染対策チーム)

視点がかなり異なること、各部署の感染対策担当者の役割が重要であること、2ラウンド目はポジティブフィードバックが効果的であることなどが報告されました。

演題発表の最後は、初めての試みとして、医療事故防止のために行っている医療安全ラウンドの様子をみみはら健康友の会の会員の方から発表していただきました。「友の会」は、「地域丸ごと健康づくり」をかかげた住民組織で1984年発足以来会員は33,000世帯、当法人事業所とさまざまな取り組みをともに行っています。写真で車いすの整理の状況が紹介され、残飯の片づけ、個人情報の管理、倉庫の管理、ナースステーションの整理整頓の問題など医療者以外の目で観察していただくことの重要性が改めて浮き彫りになりました。いずれの発表も、発表のために作ったものではなく、日頃から地道に行っている活動の報告で、大変意義深いものとなりました。

また、記念講演は、日頃からご指導いただいている浅香山病院高濱正和先生(感染管理室・看護副部長、感染管理認定看護師)に「事例を通して組織の安全管理体制を考える」というテ



川村 直子 様
(みみはら健康友の会)



会場の様子(堺市立人権ふれあいセンター)



高濱 正和 先生(浅香山病院)

マでご講演いただきました。ノロウイルスのアウトブレイク事例の経験を通して、医療安全管理者と感染管理看護師の関係とそのあり方など私たちが知りたい内容をきわめて実践的にお話しいただきました。

いよいよ待望の新病院建設も始まりました。感染対策チームとしてもまだまだ課題は山積みですが、皆で力を合わせて、一つ一つ解決していきたいと考えています。医療安全管理室



田端 志郎 副院長

と感染制御室を医療安全感染管理部のもとに総合的に運営する試みも始まりました。セラチア院内感染事故を経験した本院だからこそできる感染対策・医療安全管理をすすめ、13年前の出来事を忘れず、同じ惨劇を繰り返さないために、様々な活動に取り組んでいきたいと考えております。



会場より質問

BEST3 安全大会標語

- 1.「まあええか。心のゆるみがミス招く」
- 2.「感染対策 何やるか? “手洗いでしょう”」
- 3.「笑顔であいさつ! みんなで医療安全!」

(当日大会参加者による、アンケート投票により選出されました)

専門的な看護の実践・指導・相談を 活発に活動していきたい

主任副総看護師長
ワタナベ ミヨ
渡邊 末世



現在耳原総合病院では、この秋、日本医療機能評価(3rdG Ver1.0)の更新を予定しています。今まで2回の審査を受け合格をして、3回目の更新受審となります。

2012年度の診療報酬改定では、急性期から在宅、介護まで切れ目のない包括的なサービスの提供について、院内の取り組みだけでなく、他の医療機関や施設との連携を図りながらも良質で効率的な医療の実践をいっそう求めています。また患者様などから見てわかりやすく納得でき、安心安全な生活の質にも配慮した医療に対して評価がされたと言われて

います。今回の機能評価でも、患者様中心の医療推進、良質な医療の実践、理念達成に向け組織運営で継続的な活動を評価されます。

当院では、医療機能評価に合格するためだけでなく、全職員が「医療の質の向上」に数値目標をもって取り組み、昨年

の10月から、各職種を越え、チームを作り、病院内の基準、手順の見直しをしています。そして、看護部では主任を中心に業務改善委員会を作り、看護の基準、手順の見直しをしています。現在看護職員は、350人います。その350人が、同じレベルで看護ケアの提供を行えるためには、看護の基準、手順を院内で統一することが必要です。看護の標準を設定し、安全で責任のある看護を提供することで看護の質が保障できると考えます。そして、そのマニュアルで新人看護師の育成や、ベテラン看護師は我流の技術になっていないかを見直し、さらに、看護の専門職として患者様に安心していただける医療、看護の提供ができるよう頑張りたいと思っています。

『耳原病院の看護師さんは心がこもった(看護をしてくれた)よ』と言う声が患者様からたくさん頂けることが最終の目標です。

今後とも、ご支援、ご指導よろしくお願い致します。



東日本大震災被災地訪問 2013/06/28 コール・フィリオ (耳原総合病院緩和ケア病棟で生まれたコーラスボランティアグループ)

念願の被災地訪問が、コール・フィリオ結成10周年の節目の年に、やっと実現しました。耳原総合病院緩和ケア病棟元ボランティアの南さん(個人ボランティア)が石巻で一年余りボランティア活動をされていたこともあり、南さんと「社団法人みらいサポート石巻」さんにお世話して頂き、実現しました。

6月25日の到着日は、9人乗りタクシーで、石巻、女川、雄勝、大川小学校等、被災地の案内、説明を受け、ガレキも無くなり、整備されているとはいえ、被害の甚大さに、衝撃を受けました。翌日6月26日は、午前と午後2ヶ所演奏訪問させて頂き、6月27日も別の施設に伺いました。

担当者のお話によると、「大きくて、広い場所は催し物を受ける機会があるが、この3ヶ所は、誰も来られない空間の施設で、また震災後の周辺の激変を見せたくない施設

側の配慮から外出もないため、コール・フィリオさんには是非、演奏をお願いしたいと思ってまして」とおっしゃられたとおり、大変な歓迎と喜びを表して下さいました。預かった義援金や線香、菓子等に加えて、耳原総合病院緩和ケア病棟のボランティア田中さんより「願いが叶いますように」の祈りを込めた、ドラえもん折り紙50個等、それぞれの施設にお渡しし、大変喜んで頂きました。

コーラスは華やかで目立つ活動です。それに比べ、震災直後より入られた、病院関係者や、地道にボランティアを継続されている方には、申し訳なく頭が下がる思いです。でも、私たちの持ち味を発揮できるのは、コーラスです。「また来てね!」という声と共に、握手を受けながら、2年間積み立てたお金を使い、10年の節目に良い訪問をさせて頂きました。(文)コール・フィリオ 前平 美津代